編集後記

どうにか今年も『木簡研究』第七号の印刷を大会までに終わることができそうである。できそうであるというのは、毎年のことながら、十月末から十一月中旬にかけては、大会までに会誌の出版をまにあわせるべく仕事をすすめながら、たえず、もし万一まにあわなかったらという一抹の不安を心のすみからのぞくことができないでいるためである。木簡を発掘された各地の発掘調査担当者からの原稿は、それぞれに多忙な発掘現場をかかえる中で、執筆していただいているから、七月末の原稿締め切りに全原稿をいただくということはできないものの、それでも八月中旬にはほぼ幹事の手もとに送付してもらっている。また会誌後半の論考も、そのころにはいただいている。だから十二月のはじめに出版というのは、それほどいそがしいというわけでもなさそうなのだが、なぜかこの一抹の不安が心の隅からはなれた年はなかったように思う。

会誌は通常の歴史や考古関係の学会誌とちがって、木簡の史料集のような役目もはたしているので、釈文だけは一〇ポイントにして、本文より大きくしたり、割り組みが多かったりして、編集作業が結構手間どるし、――印刷工場の文選や活字の組みの工程も一層めんどうくさいことになって、担当する工場には毎年ゲラの校正で迷惑をかけることになる――たまには、かなりおくれてからの原稿の入稿という場合もあったりするのが、この不安をとりさってくれない原因の一つになっているのだろう。作業を、もっと効率よく合理的にすすめるよう、毎年幹事のあいだでは努力しているので、不安感は次第に減少しているのだが、油断は禁物だから、この不安感は大切に幹事の心の中にしまって緊張を持続した方が会誌を期限までにつくりあげる秘訣なのかもしれない。

こうした不安からくる緊張感というのも、会誌の内容が充実してくると楽しいものではある。今回の七号のように早川、大庭両氏の力作が二つも収録され、八四年度の出土木簡の原稿が前年より二割増になり、さらに田中琢氏のローマの木簡の紹介や石上英一氏の牛札の木簡についての原稿など質量とも圧巻になってくると、編集者冥利につきるという感をもたせていただいている。

ただ、残念ながら韓国新安沖出土の木簡については、大会の折の予定とちがって、本号に掲載できなかった。

なお、本号から木簡釈文の字体を、例外をのぞいては、常用体を使用することに統一した（凡例参照）。また木簡釈文の×印については、折損等によって文字が欠けているものについてのみつけることとし、折損していても文字がそれによって失われたのかどうかわからない場合や削屑の場合はつけないこととした。

このような会誌の形式についても、内容ともども会員各位の御意見をおよせいただければ幸甚である。また、幹事になってから二～三年の若手の人たちが旧幹事をさしおいてイニシァティブをとりだしたのも、心強い動向のように思われる。会員諸兄からも種々御助言下さるよう御願いしたい。

（鬼頭清明）